

ハーモニー

Harmony

第 39 号 2005 年 12 月 10 日発行

日本養護教諭教育学会

Japanese Association of Yogo Teacher Education

日本養護教諭教育学会

事務局：〒 448-8542

刈谷市井ヶ谷町広沢 1

愛知教育大学養護教育講座

後藤研究室

TEL&FAX 0566-26-2491

振替口座：00880-8-86414

<http://www.yogokyoyu-kyoiku-gakkai.jp>

目 次

第 13 回学術集会（埼玉）の報告	2
第 13 回学術集会参加者の声	3
第 13 回学術集会アンケート結果	4
養護教諭の専門領域に関する用語の検討プロジェクト —中間報告を終えて—	5
トピックス	
中央教育審議会	
「健やかな体を育む教育の在り方に関する専門部会」の状況	6
日本教育大学協会全国養護部門主催の公開シンポジウムについて	7
日本養護教諭教育学会平成 17 年度総会報告	7
お知らせ・編集後記	8

第13回学術集会(埼玉)の報告

学会長 鎌田 尚子
(女子栄養大学)

第13回学術集会を10月8日～9日に学会員の皆様、埼玉県教育委員会ならびに埼玉県養護教員会等ご後援の下に成功裏に終えましたことを報告します。埼玉では初めての学会でしたから会員の加入とご参集のため、何回もお誘いの文書を配らせて頂きました。全国誌、関連学会と広報に手を尽くしました。お蔭様で252名のご参会をいただき、「奥が深く理念がしっかりした学会、論点を大切にした議論、質の高い学会、エビデンスを取り上げ大変有意義な学会」と評価をいただき、かつ参加者には熱心なご討議を盛り上げていただき、実行委員会、事務局一同、その成果に満足すると共に、本学会に貢献できたことを喜んでおります。

養護教諭百周年を記念して「養護学」を確立するための本学会の里程として「エビデンスに基づく養護教諭の『職』を究める」こと一本に絞って運営しました。学会長の基調講演に続いて、学会共同研究がエビデンスの研究方法を追究し、特別講演での香川芳子学長の臨床クリニック実践のコホート成果はデータに基づく講演でありました。エビデンスの課題を正面から捉えて養護教諭の職を討議したシンポジウムこそ養護学を究める示唆に富む交流であり、口演発表もエビデンスを問いつけるものでありました。

すばらしい、見事な学会運営にしてください。ご来賓、座長、実行委員会の皆様、三木先生、遠藤先生、渡邊様、早福様、田中様、大学の関係部署の皆様、心より厚く御礼申し上げます。多謝。

第13回学術集会を終えて

実行委員長 三木とみ子
(女子栄養大学)

会や催し物を行う場合、願うことは①内容に満足②発表者や参加者に心地よい環境整備③気象条件がよい等ではないかと思う。この中の①、②は人の力と知恵で何とかできる。しかし、如何ともしがたいのが③の気象条件。当日の朝は、小雨。まずまずの天候でホッと一息。実行委員会としての最大の役割は②の開催中の環境条件の整備であろうと思う。よく、「準備8割本番2割」といわれる。実行委員もこれをモットーに、本番に向けて準備を進めた。組織は、埼玉県養護教諭の研究会、本学の同窓生と本学の教職員。第1回の会合を昨年12月10日開催した。皆、鎌田学会長の熱い思いを受け、会の成功を願いスタートした。実行委員はそれぞれの役割を果たすべく、学会開催日まで日々奔走の繰り返しであった。

学術集会参加者は252人、その方々の感想の中に、会場の表示、案内、受付等の状態がよかったとの声を頂いた。とりわけ、「学生の受け答えがとても感じよかった、輝いていたよ」等々の感想が多く、早速学生に伝えた。事務局担当からの「案内と受付は学会の顔よ」という言葉に見事に応えてくれた学生に感謝。

メイン会場は、「寒かった」「風が冷たかった」等の声があり、大変申し訳なく思っている。特別講演、シンポジウム、一般口演等での会場で最も気を遣ったのはパソコンの環境条件であった。ほとんどの方がパワーポイントを活用しての発表。この準備は遠藤副実行委員長を中心に見事な準備で円滑に進行。ホッと胸をなで下ろした。そして、埼玉県養

護教員会が中心となって企画進行した懇親会。参加者 90 人。ここでは、何と言っても皆が、輪になって踊った「秩父音頭」と、「交流と語らい」のなごやかさが和となったひととき。「養護教諭の明日につながればいいなあ」と、参加者のつぶやきが印象的であった。最後に本学術集会開催の最初から事後処理まで踏ん張った事務局実働部隊の皆に心からの感動と感謝を贈ります。

◇◇◇第 13 回学術集会参加者の声◇◇◇

～．～．～．～．～．～．～．～．～．～
第 13 回学術集会に参加して
～．～．～．～．～．～．～．～．～．～

松本 恵（福岡市立城南中学校）

今回の学術集会のテーマでもある、養護教諭の実践におけるエビデンスについては、かねてから疑問を持っていました。医学・看護分野におけるエビデンスはかなり研究が進んでいますが、養護教諭の実践においてはどのように解釈したらよいのかと。そこで今回行われた学会長の鎌田先生の講演やシンポジウムにおける提言など参考にしながら、今後、その構築に向けて自分なりに模索していきたいと思います。

2 日目は、一般口演で発表させていただきました。拙い内容でしたが、フロアの皆様から様々なご意見やアドバイスをいただきまして、ありがとうございました。自分の実践を反省的に捉える作業（研究計画から記録・分析・考察に至る一連の作業）は、時間と労力を要します。これが日常の業務と並行し、難しさを感じます（途中でやめたくなくなります）。しかし、学術集会の場で皆様の様々な研究の試みを知ることは大きな刺激となり、今後の研究における支えとなりました。

最後になりましたが、今回の学術集会の運

営に携わり、お世話いただきました関係者の皆様方に深く感謝申し上げます。

～．～．～．～．～．～．～．～．～．～
モチベーションの賦活源
～．～．～．～．～．～．～．～．～．～

石塚 智恵子（京都市立松ヶ崎小学校）

第 13 回日本養護教諭教育学会に初めて参加した。学会共同研究「養護診断開発のための基礎的・実践的研究—四肢の痛みの訴えを例に一」の事例提供をさせていただいたことが参加の動機である。さらに、実践を文章化する際、例えば保健室経営か保健室活動のかなど用語の使い方で絶えずストレスを感じていたため「用語の検討プロジェクト」の中間発表に期待を寄せていた。また、今回の学会メインテーマ『エビデンスに基づいた養護教諭の「職」を究め、養護学の確立を目指す』に関心を持っていた。

参加前は、学会は「養護学の確立」を目指し、大学の研究者や修士等、研究に長じた方たちが中心になって研究を行うところであり、私自身は学会に参加することで研究やその成果を学ぶという感覚であった。

参加後、「自分の実践は子ども達のニーズや事実に基づいたものか、子ども達の健康の保持増進にどのように役立ったか、結果事実により証明する」ことが職の専門性を深めること、1 校に 1～2 名しかいない養護教諭だからこそ実践をまとめ、伝え、共有（使う）することが重要であること、学会が研究を通じて何かを生み出すところであり、それは他者がしてくれることではなく、自分の実践を問う場所であることが理解できた。

とはいえ、実践をどのようにして「実践知」にしていくのか、これからスタートである。学会参加は自分の中に専門性を求め続けるモチベーションの賦活源となった。

第13回学術集会 アンケート結果

学術集会事務局

第13回学術集会に参加して

柿沼 いずみ（静岡県立清水南高等学校）

これまで、学会には入会したものの、学会誌・学術集会抄録集を読むだけの会員でしたが、この度埼玉での学術集会に参加してみました。これまで関心があった養護診断、エビデンスなどについて研究発表、シンポジウムが行われ、とても興味深く聞かせていただきました。当然のことながら、普段会誌を読んでいるだけではわからない、発表者の方のそれぞれに対する考え・実践の奥深さ、熱い思い等を感じ取ることができ、とても刺激になりました。養護診断にしても、エビデンスにしても、現場の養護教諭と養成機関の先生方とで共に作り上げていくためには、私たち養護教諭一人一人が、今以上に自分たちの実践を振り返り、得られたことをまとめ、明らかにしていくことが大切なのだと感じました。

また、懇親会では、養成機関の先生方に日頃の執務の疑問点などをお聞きすることもでき、貴重な時間を過ごすことができました。

この2日間様々な事柄を学び、また、それらに関する様々な文献を読みたい、調べてみたいなど、してみたいことで頭がいっぱいになり、飽和してしまったような状態で帰ってきました。けれど、一端学校に戻ってしまうと、次から次へと来室する生徒に追われてあっという間に一日が過ぎてしまいます。慌ただしい日々ですが、「養護教諭はいったい何を判断しているのだろうか。」などということを常に念頭に置いて生徒に対応していきたいと思いました。そして、来年の学会まで、私自身、一養護教諭として、今の自分の立場でできることを、精一杯していきたいと思いました。

日本養護教諭教育学会第13回学術集会が無事開催され、本誌にて会員の皆様にご報告できますことを大変嬉しく存じます。偏に、埼玉県養護教員会の先生方をはじめ、本学会にご尽力下さいました先生方、また、すっきりしない天候にも関わらず、ご参加戴きました先生方のお陰と心より感謝申し上げます。

学術集会の折に戴きました貴重なご意見をまとめましたので、以下ご報告致します。

1. 回答者数 31名：県内 2名、県外 29名
2. 回答者のプロフィール
 - ①会員種別：正会員 23名、非会員 8名
入会時期 13回学術集会から 5名、以前から 18名、無回答 8名
 - ②勤務地：県内 2名、県外 29名
 - ③年齢：20代 2名、30代 4名、40代 4名、50代 11名、60代 5名、無回答 5名
 - ④勤務年数：1年未満 2名、1～10年 8名、11～20年 1名、21～30年 10名、31～40年 1名、41年以上 1名、無回答 8名
 - ⑤校種：小学校 4名、中学校 6名、高等学校 3名、盲聾養護学校 3名、大学 6名、院生 2名、OB 1名、その他 2名、無回答 4名
3. どのようにして知りましたか(複数回答)
雑誌(機関紙含) 20名、チラシ 4名、教育委員会から 1名、知人から 3名、会員から 2名、その他 1名、無回答 1名
4. 何に興味関心がありましたか(複数回答)
シンポジウム 13名、学会共同研究 13名、用語の検討プロジェクト 5名、一般演題 9名、無回答 3名

5. シンポジウムはいかがでしたか
良かった19名、やや良かった5名、普通
4名、余り良くなかった0名、良くなか
った0名、無回答3名

6. 1) 学術集会の運営について

①肯定的意見(12名): きめ細やかな運営
と対応で安心して参加できた。学生ス
タッフが素晴らしく、気持ちが良かっ
た。ゆったりとした日程で移動がスム
ーズだった等

②建設的意見(5名): 学校保健学会と同
時期なので演題発表が少ないのでは、自
由に書けるお知らせ版があると良い等

2) 会の内容について

①肯定的意見(13名): エビデンスに興味
があるので有意義だった。理念がしっか
りしている会だった。シンポジウムでは
仕事をする上での根拠の大切さがわか
り、取り組むべき課題がみえてきた。「養
護学」確立のために進んでいる息吹を感
じた等

②建設的意見(2名): 口演10分質疑10
分では短いのではないかな等

3) その他、感想

①肯定的意見(3名): ポスターセッシ
ョンでは説明の時間がとってあり良か
った等

②建設的意見(3名): 学会日程も会場に
明記し、日程に合った抄録集にして欲
しい。質疑応答の記録は必要なのか等

4) 今後希望するテーマ

特別支援教育、健康相談活動、現場で使
えるチェックリストの開発・評価等 以上。

アンケートにご協力戴きまして有り難
うございました。

養護教諭の専門領域に関する 用語の検討プロジェクト

—中間報告を終えて—

河田史宝(金沢市立北鳴中学校)

第13回学術集会の2日目(10月9日)に
中間報告を行ないました。専門用語を抽出
した経緯と抽出用語の分類、抽出用語の一
覧について報告し、用語解説の様式(語意や使
い方の説明等)を「養護教諭教育」「健康相談
活動」の説明文(案)から例示しました。会
場からは様々なご意見がありました。それ
を受けて、学術集会終了後に行った第6回
合では、以下の今後の検討課題を確認しま
した。

①抽出用語の分類の枠組みでは、「B. 類似
する用語が多くその意味が明確ではない
もの」「E. 一般に用いられているが養護
教諭特有の使い方が見られるもの」の表
現を再検討する。

②分類Eにあげた用語をはじめとして、
抽出用語が適切であるかを確認する。

③抽出用語は、養護教諭の実践記録や
論文から抽出した用語であることを明
確にするために抽出根拠となった具
体例を示し、養護教諭の実践と結
びついていることを示す。

④用語解説の様式は、例示したと
おり定義と解説に分ける。定義は短
く示し、その後の解説では、経緯、
特色、類似語等を示す。

また、すでに学校保健用語辞典や中
教審で示されている用語も、学術学
会として一度検討したうえで、説
明の際に用いていくことなど、用
語の解説に際しては慎重に検討し
ていくことを確認しました。

今後も会員の皆様からのご意見を
いただきながら検討をすすめてい
きたいと思しますので、よろしく
お願いいたします。

トピックス

中央教育審議会

「健やかな体を育む教育の在り方に関する専門部会」の状況

植田誠治（茨城大学）

表記専門部会の審議状況が、平成17年7月27日付けで冊子にまとめられ公表された。この専門部会では、体育・保健の教育の今後の在り方が議論されている。

まず最初に、すべての子どもたちに共通して最低限必要なもの（いわゆる「ミニマム」）を、保護者のニーズや社会全体としての必要性等を踏まえつつ、「目的」として特定することの必要性が述べられている。そして、とりわけ保健では、1)「自他の命を大切にする」という視点、2)次の世代につながる教育という視点、3)情報を収集し正しく理解し判断する力を育成していくという視点、4)知識を行動に結び付ける力を育成していくという視点、の4つに留意することが述べられている。さらにはそれを踏まえて、1)心身の健康、2)環境と健康、3)安全、の3つの分野について、具体的に「～ができる」という表現で行動目標的に、「すべての子どもたちが身に付けるべきもの」が示されている。

また、今後の検討における留意事項として、1)学習指導要領の内容の精選、2)小学校低学年における健康に関する学習内容の吟味、3)保健と関連する他教科との関係、4)保健と体育の連携、があげられている。

さて、専門部会の名称からもわかるように、ここでは体育・保健という範疇にとどまらない議論がなされており、特に性教育と食育の問題についても出された意見がまとめられている。

いずれの内容も引き続き検討がなされる

予定であり、今後の審議経過を見守りたい。

日本教育大学協会全国養護部門 主催の公開シンポジウムについて

今夏、日本教育大学協会全国養護部門の事務局である北海道教育大学札幌校より、本シンポジウムの開催を学会員に通知してほしい旨の依頼がありました。

このシンポジウムは、「養護教諭の資質向上を目指したモデル・コア・カリキュラム」をテーマとしており、養成側教員のみならず、現職の方、行政の方も意見発表する公開のものということでしたので、学会員への案内をしました。以下はその報告です。（理事会）

「モデル・コア・カリキュラム」の開催

大谷尚子（茨城大学）

表記の公開シンポジウムが、2005年10月10日に東京学士会館で行われました。このことは、養護教諭教育にかかわる一大イベントであったのではないかと、きっと後世になって養護教諭教育の歴史を振り返ったときに、アレが分節点であった、と思わされるのではないかと思うほどです（主催者側に身を置く身として若干鼠眉目のきらいがありますが）。以下、その理由の一端をあげてみます。

1. 養護教諭養成のためのカリキュラムというテーマで、多様な人々が一堂に会しました。養護教諭養成にかかわるというのは、現に養護教諭養成機関で授業を担当している大学教員だけではないということを実に示す参加者の構成でした。参加者数117名のうち、大学教員（計71名、＜現65、非常勤3、元3＞）、養護教諭（28名＜現25、元3＞）、教育委員会（6名）、学生・院生（9名）及び文科省の担当係、関係団体の元理事長・元会長と多彩でした。対象

となる学生も自分達の教育内容への要望を言っているのですし、現職養護教諭も後輩への教育に関心をもち現職教育との関連から養成教育へ物申すがあっていいはずです。このような人たちの声を聞くことで、養護教諭養成内容の質的充実がはかれることになるはずです。

今回、養成教育を担う側が、そのことに関心をもち関わる立場の方々にも参加いただける形の公開のシンポジウムを開催したということは画期的なことです。

2. 参加者構成にかかわることの2点目。養護教諭養成に直接かかわる大学の教員のうちで、主催者側である日本教育大学協会全国養護部門に所属している教員の参加人数は28名です。その他の大学の教員はそれを上回る数の参加となりました。〈他の国立大学教員7名、県立大学教員5名、私立大学14名、短大11名〉。これまでは、教大協養護部門研究委員会という枠内での研究・協議でしたので、教大協以外の国・公・私立大学や短大の教員も一緒になって、カリキュラムを考えあったということになります。様々な種類の大学が養護教諭養成をしているのですから、養護教諭養成のあり方を論じ、それを共通のものにすることは至難なことなのだと推察されます。それでも、それを進めていかなければなりません。
3. 協議の内容がモデル・コア・カリキュラムということです。これは、どのような養成機関であっても養成教育の内容に盛り込むべき項目を示したもので、一定の枠組み〔群、領域〕に分けて列挙しています。現行の教育職員免許法の修正案というのではなく、抜本的に考えたカリキュラム案の提案です。教育職員としての養護教諭養成にあっては、「養護学」という学問の発

展を望みつつ、構造的な教育の方策を考えていかなければなりません。医学・看護学という学問体系ではなく、養護学という学問体系を背景に、養護教諭を養成していくのだという宣言をここにしたという点で、意義のあることだと思います。

日本養護教諭教育学会 平成17年度総会報告（速報）

平成17年度総会は、会員246名（含委任状170名）の出席により開催されました。平川俊功会員と植田理事による議長のもとに審議・承認されましたので報告します。

議案1 2004年度事業報告：第12回学術集会（熊本）に350名の参加者があったことなどが報告され、承認された。

議案2 2004年度決算・監査報告：村瀬理事から報告され、楠本・小林会計監査委員の監査報告を受けて承認された。

議案3 2005年度事業経過報告：「養護教諭の専門領域に関する用語の検討プロジェクト」（代表：後藤ひとみ、植田誠治）による検討結果（中間報告）、「養護診断開発のための基礎的・実践的研究—四肢の痛みの訴えを例に一」（代表：岡田加奈子）による研究成果が第13回学術集会で発表されたこと、日本養護教諭教育学会倫理綱領作成の作業を進めていること、日本養護教諭教育学会の著作物複写利用に係わる権利委託を学術著作権協会との契約で進めていること、日本養護教諭教育学会誌第9巻第1号の発行に向けて作業を進めていることなどが報告され、承認された。

議案4 2005年度補正予算案：「養護教諭の専門領域に関する用語の検討プロジェクト

ト」では当初の見込みよりも交通費がかかるため補正予算で増額したことが説明され、承認された。

議案 5 2006 年度事業計画：第 14 回学術集會を愛知県で開催することが提案され、承認された。研究助成と「養護教諭の専門領域に関する用語の検討プロジェクト」の成果（最終報告）を発表すること、機関紙「ハーモニー」を年 3 回発行し、日本養護教諭教育学会誌第 10 巻第 1 号を発行することなどが提案され、承認された。

議案 6 2006 年度予算案：予算案が提案され、承認された。

議案 7 研究助成金対象研究の選定について：「保健学習の実践から見た養護活動」（小口博子他）と「養護実践力の育成を目指す養護教諭養成カリキュラムの検討—「養護概説」担当者による分析—」（斉藤ふくみ他 5 名）の 2 件に対する研究助成の提案がなされ、承認された。

議案 8 次期役員を選出について：次期役員が岡本推薦委員長より推薦され、承認された。

理事：鎌田尚子（女子栄養大学）、後藤ひとみ（愛知教育大学）、斉藤ふくみ（熊本大学）、鈴木薫（岡山市立大宮小学校）、鈴木裕子（横浜市教育委員会）、高橋香代（岡山大学）、竹田由美子（神奈川県立保健福祉大学）、徳山美智子（大阪女子短期大学）、山崎隆恵（神奈川県立藤沢総合高等学校）の 9 名

監事：浅利恵子（弘前大学教育学部附属養護学校）、貴志知恵子（徳島県立徳島北高等学校）の 2 名（以上 50 音順）

議案 9・10 「日本養護教諭教育学会会則」「日本養護教諭教育学会誌投稿規定」の改正について：改正案がそれぞれ提案され、承認された。

議案 11 「日本養護教諭教育学会倫理綱領」：資料に基づき説明があり、承認された。

総会の後、第 14 回学術集會学会長である愛知教育大学 後藤ひとみ会員から挨拶があった。

お知らせ

次期学術集會の開催について

☆期日：2006 年 10 月 7 日（土）～ 10 月 8 日（日）
☆場所：愛知教育大学
多数の発表と参加を期待しています。

事務局より

☆所属先の変更・連絡先の変更がありましたら、会員番号を明記して F A X または E メールにてお知らせください。

JAYTEjimu@yogokyoyu-kyoiku-gakkai.jp

編集後記

今年は新型インフルエンザの流行が懸念されています。新型といえども予防の第一は、うがいと手洗い、規則正しい生活とされています。健康生活の基本は普遍です。（山崎）

